

war correspondent

林真理子

戦争特派員

ウォー・コレスポンドント

上



文春文庫



文春文庫

---

# 戦争特派員 上

定価はカバーに  
表示してあります

1990年11月10日 第1刷

著 者 林 真理子

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

---

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan  
ISBN4-16-747606-1

文藝文庫

江苏工业学院图书馆

戰爭特派員

藏書章

林真理子

文藝春秋



ウオーレスボンデント  
戦争特派員上／目次

|     |             |     |
|-----|-------------|-----|
| 第一章 | トランジット      | 7   |
| 第二章 | エスニック・レストラン | 35  |
| 第三章 | チャイニーズ・スープ  | 62  |
| 第四章 | 愛人ストリート     | 87  |
| 第五章 | 迎え火         | 117 |
| 第六章 | カーエリア       | 149 |
| 第七章 | ベトナム人街      | 183 |
| 第八章 | 東京コレクション    | 236 |



戦争特派員  
上





## 第一章 トランジット

マニラの夕陽というのを、奈々子は見たことがある。

今から三年前の夏、セブ島に泳ぎにいった。その帰り立ち寄ったマニラの街は、ちょうど日暮れだった。ヤシの木々を黒く染めて、重たげな<sup>だいたい</sup>橙色の太陽が落ちていくのを、奈々子はサングラスごしに眺めたものだ。

マニラの夕陽は世界一美しいなどとよく言われるが、そうでもなかったと奈々子と思う。もし心を打つほどのものだったら、自分はきつとサングラスをはずしていたはずだ。それをとる、とらないで、一緒にいた男と小さな口争いをしたのをなぜかよく憶えている。

「マニラの夕陽だぜ。サングラスなんかやめて、じっくりと見ろよ」

「陽にずっとあたってたから目が痛い。それにそういうこと、人に指図されるの嫌いよ」  
旅の終りで、たぶん疲れていたのだろう。強い言葉がいくつも出た。

あの頃から、自分はかなり在意地っぱりだったと、奈々子はふと苦笑いをしたいような気分になった。

だが、その笑いは唇が乾いているために途中で止まり、ただ口元がゆがんだだけだ。だいいち、こんな状態で、どうして苦笑いにせよ、笑うことができるのだろうか。

飛行機に閉じ込められてから、もう二時間以上もたつ。給油が終り次第、すぐに出発するはずだったのに、エンジンが不調だというアナウンスがあったきりだ。時間はじりじりとたっていく。

南国の陽はなかなか落ちない。台北空港の滑走路は、ゆるい地平線を描いていて、その場所で大きな夕陽は長いことぐずぐずしている。それを見つめ、思い出をなぞるという行為はロマンティックだが限界がある。

もうじき成田だと思っていたから、手持ちの雑誌も本もすべて読んでしまった。いらだちはつのるばかりだ。隣りの席のアメリカ人が、早口の英語でスチュワード스에 文句を言い始めた。「いま全力をつくしていますから、もう少し待ってください」

鮮やかな更紗さらさの民族衣裳を着たスチュワードスは訛りの強い英語で答える。彫りの深い素晴らしい美人だが、にこりもしない。

「ジュースをちょうだい。氷をいっぱい入れて」

奈々子はハンドバッグから煙草をとり出し、せかせかと火をつけた。ついさっき、ノンスモークキングのサインが消えたばかりだ。その瞬間、ライターをとり出した。煙草を吸う時は、いつも動作が怒ったようになる。禁煙を今年になってから四回試みて、すべて失敗しているのだ。昔ならいざ知らず、現代は吸わないことの方が流行だ。商売柄、流行と思われることはできる

だけ身につけたり、ためしてみたいと思うが、禁煙だけは駄目だった。辛い煙草と、甘ったるいオレレンジジュースをかわるがわる味わった時、二度目のアナウンスがあった。

「エンジン不調のため、台北に一時泊します」

台北に一時泊するというアナウンスに、機内がどよめいた。

「冗談じゃないわ」

奈々子も思わず叫んでいた。あのつんとしたスチュワーデスをつかまえてこう怒鳴りたい。

「私は観光で乗ってるんじゃないのよ。私の出張の帰りをみんなが待ってるのよ。明日は東京で大事な会議があるのにどうしてくれるの」

けれどそんなことを言っても仕方ないことは、旅慣れている奈々子にはよくわかっていた。それに明朝は五時に台北を出発し、七時すぎには成田に到着するという。その言葉を信じるなら、いつもの時間にオフィスに行くことはできるかもしれない。いずれにしても、そうたいした被害にはならないと心を静める。

中国語、英語に続いて、日本語のアナウンスがあった。

「空港には係員が出迎えておりますので、指示に従ってバスにお乗りください。ホテルまでご案内いたします」

ロビーをめざして、何百人という乗客がぞろぞろと歩き始めた。外国のエアラインであるにもかかわらず、例にもれず日本人の団体が多い。シンガポール、台湾とまわるこの路線は、みな軽装の夏服だ。さんざん待たされたあけく、これから予期しなかったホテルへ向かうとあつ

て、蛍光灯の下、みなぐったりと疲れ果てた顔をしている。

いくつかの行列ができ、奈々子はその先頭近くを歩いていた。洋酒や土産<sup>みやげ</sup>を山のようにぶら下げた乗客とは違い、バッグだけだから身軽なものだ。履きなれたフラットシューズで、滑るようにロビーをつつ切る。

入国カウンターの前まで来た。いちばん前の乗客が、トランジットカードを見せて、そこを通ろうとした。

「ノー、ノー」

検査官が大げさな手ぶりでそれをおしとどめる。どうやら正式なカードを見せろと言っているらしい。

奈々子はすっかりあきれてしまった。他に到着便はないらしく、夜の闇がしのびよってあたりは閑散としている。エンジントラブルで、一泊を余儀なくされたこの便の乗客のことが、どうして伝わっていないのだろうか。また、誘導するはずの係員はどこへ行ってしまったのだろうか。先頭の客は困ったようにあたりを見わたした。Tシャツにショートパンツの日本人の若者だ。どうやら英語は全く喋<sup>せ</sup>れないらしい。

奈々子は迷った。会話に自信が無いわけではない。しかし、列からとび出して検査官の前に進み、みなを代表して交渉するというのは相当の勇気がある。

「僕たちのことを聞かなかったかい」

その時、奈々子のすぐ後ろで男の声がした。

「エンジントラブルで飛び立たないのさ」

入国検査官の前で、男はいくつか短い説明をし、さっさとその前を通ってしまった。おかげで奈々子たちも、トランジットカードを見せるだけで、そこを通過することができた。

男の英語はなめらかで的確だった。奈々子は今でも過に何回か英会話のレッスンを受けているからそれがよくわかる。しかし、そうかといって母国語という感じもしない。別にもうひとつオリジナルな言語がある国の英語だが、その国がどこだかわからないのだ。

「フィリピン人かな。華僑<sup>カキウ</sup>ってというのが妥当なところかしら」

外国旅行に行くと、よく国籍不明の人間に出くわすことがあって、それを確かめるのも奈々子の楽しみのひとつだ。

だから空港からホテルへと向かうバスで、男の隣りの席に座れるように図った。

男は国籍ばかりでなく、年齢もわかりづらい。生えぎわのあたりが灰色がかった髪は、男が中年をすぎていることをあらわしているが、身のこなしや表情はひどく若々しかった。茶色のチノパンツに、麻混の白いシャツといういでたちも、無造作のようであって、なかなか凝っている。奈々子は窓を眺めるようなふりをして、男をさっきからじっと観察していた。そんな視線を感じているのかどうか、男はあくびをひとつした。健康そうな歯がすっかり見えて、奈々子は男の年齢がますますわからなくなる。

男は不意にポケットの中に手をつっ込んだ。もそもそ動かしていたかと思うと、ガムをひとつとり出し、口にほうり込む。「梅干しガム」という包みが掌に残った。

「あらっ」

思わず口に出た。

「日本人だったんですね」

「そうですよ。僕は日本人ですよ」

男は穏やかな微笑をうかべた。そうすると唇の両端に深いシワがあり、男は少し哀<sup>かな</sup>し気に見えた。

「ごめんなさい。あの、英語があんまりお上手だったから」

「そんなことはないですよ。スラングだらけの英語ですよ」

男は失礼といって、軽く足を組んだ。靴はラバソールで裏がゴム貼りだ。非常に歩きやすくなっている。奈々子は自分よりはるかに旅慣れているらしい男に、ふと甘えなくなった。

「私たち、これからどうなるんでしょうか」

「ホテルへ行くんですよ」

「でもさっきから、いいかげんなことばかりの会社でしょ。ちゃんと泊まれるかしら」

「ホテルに泊まれなくなつて、たいしたことはないでしょう」

男は言った。

「空港にもどつて、ロビーのソファに横になっていればいい。朝になれば誰かが起こしてくれますよ」

奈々子はそれきりおし黙った。男がいくらか不機嫌で、そっけないような気がするからだ。

奈々子はあまりこういうめに会ったことがない。東京にいる時でも、外国でもたいいの国の男が、彼女にものを尋ねられると嬉しそうに答えたものだ。

奈々子はもうじき二十八歳になるが、二十代前半にしか見られない。東京の真中で、マスコミやファッションの仕事をしている女はほとんど年齢不詳になるが、奈々子もその一人だ。白いピケのミニスカートの、大きく肩パッドの入った麻のジャケットをはおっている。これはユウコ・オクヤマが東京コレクションで発表したものだ。そこの企画室サブチーフというのが、奈々子の肩書きだった。

背丈はそれほどではないが、すんなりと足が長い。そんな奈々子にミニスカートはよく似合う。団体客の一人らしい若い男が、さっきから自分をしきりに見ているのに奈々子も気づいていない。

つんと肩をそびやかしたはずみに、再びまじまじと隣りの男の横顔を見てしまった。高い鼻<sup>び</sup>梁<sup>りょう</sup>の先に少し脂がういている。そのかわり、この暑さだというのに、男のこめかみのあたりにも全く汗が見られない。

「少しもいい男じゃないわ」

奈々子は心の中で、いまいまして結論を下した。

「なんか気取っちゃってさ。英語は確かにうまいけど、よく見ればただのおじさんじゃないの」

不意に男が首を向けたので、奈々子はあわてた。まるでこちらの心の中を見すかされたよう

ではないか。

「ホテルに着いたら——」

男はゆつくりとつぶやくように言った。

「フロントまで全速力で走るんです。どうせトラブル用の、空港に近いだけが取柄のホテルに決まってる。部屋もそれほどあるとは思えない。ぐずぐずしていたら、知らない人間と一緒に部屋にされてしまいますよ」

「わかりました」

奈々子は頷いたが、男の言葉には矛盾がある。たった五分前に、ホテルなど泊まれなくてもどうということはないと言ったばかりではないか。

男は顔を正面にもどした。それきり何も話しかけてこない。奈々子は少し腰をうかし、ショルダーバッグの紐をかけ直した。すぐに飛び出せる用意だ。

いずれにせよ、男は小さな親切を見せてくれた。それで奈々子はやっと気がすんだのだ。

窓からのあかりが急に増えたと思ったとたん、バスが止まった。

奈々子は何人かをつきとばすようにしてバスを真先に降り、ホテルの前庭を必死で走った。バスは二台ほどもう先に着いていたが、ぐったりと疲れ果てている人々は、奈々子のように走ったりはしない。フロントの前に立った時、十人ほどが行列しているだけだった。

「いい部屋よ。早くしてちょうだい」

英語で怒鳴るようにして叫ぶと、制服を着た若い女が、投げるようにして鍵をよこした。



「836」という数字だった。

それにしても、男の言ったことはあたっていたと奈々子は思った。まだ夜の八時にならないというのに、このホテルは驚くほど人気がない。ぼんやりとしたあかりの下で、安っぽい中国風の壁紙や、しつこく彫刻をほどこした椅子が並んでいるのが見える。かなり広い建物で、フロントの横には大きな売店があるのだが、そこはすでに閉店しているのか、休店しているのか、ショーケースの上に、白い大きなカバーがかかっている。

奈々子がそんなふうにあたりを見わたしていたのもわずかな間で、バスが次から次へと到着してロビーは大混乱になった。フロントの行列は二列から五列になり、人々は口々に「キー、ルーム」と叫んでいる。

エレベーターの前で、奈々子は二人連れの女の子たちと一緒にになった。こんがりとした彼女たちは、モルジブに泳ぎに行った帰りだという。

「とんだことになっちゃったわね」

「本当。こんなこと起こるなんて信じられない」

旅の気やすさから、どちらも屈託なく喋り出す。

「あのお、私たち、さっきから言ってたんだけど、それってユウコ・オクヤマの服でしょ」

「そうよ」

「わぁー、カッコいいんだあ。さっきから目立ってたもんね、すごお。私たち、ユウコの服の大ファンなんだけど、高いからなかなか買えないの。まだ学生なんだから仕方ないけどさ